

研究目的 小・中学校において〔特別の教科 道徳〕が始まり、指導者を養成する大学等の教職課程では、道徳教育に関する資格科目のいっそうの充実が望まれている。本研究では、筆者が担当する道徳に関する資格科目〔道徳指導法と道徳指導法（初等）〕で毎授業時に実施している履修者の短い授業感想文（自由記述）を基本データとし、授業改善に繋がる可能性について、テキストマイニングを用いて分析・考察する。

研究方法 近年、テキストマイニングは、広く文書に含まれる有益な情報を計量的かつ質的に把握するために使用されている。ここでは、テキストマイニングツールとして広く活用されている KH Coder を用いる。

第1段階の基本的な分析方法として、抽出語リスト、抽出語間および抽出語と外部変数（授業回数：回数に対応する授業内容を表す質的変数〔名義尺度〕）との関連性ならびに、その強さを可視化できる共起ネットワーク、抽出語を文脈までたどる KWIC コンコーダンスおよび関連語検索を用いる。続いて**第2段階**の仮説検証的な分析方法として、仮説コード（以降、コードと呼称、授業回数ごとの授業コンセプトに対応）を設定して、コーディングルールに基づく質的データ分析を行う。コードは、近い将来の道徳科推進者として育てほしい意識である「自己理解・他者理解」「道徳教育（道徳科）の必要性」「授業者としての意識」、さらに授業における技能面の向上を念頭に置いた「授業づくり」「指導案づくり」の5分類である。これらのコードを構成する「語」を選定するために「抽出語リスト」「共起ネットワーク」「KWIC コンコーダンス」などを用いる。

分析結果と考察 対象とする分析用データは、平成30年度前期（履修登録99名）、令和元年度前期（履修登録87名）である。**第1段階**の分析結果から、各年度ともに、〔思う〕〔授業〕〔考える〕〔難しい〕〔道徳〕〔指導〕〔意見〕などの出現頻度の高いことが分かった。ただし、〔道徳指導法〕という授業にも拘わらず、平成30年度前期および令和元年度前期ともに、〔道徳〕という語の出現頻度は必ずしも多くない。このような結果になった理由は「道徳に関連する講義である」という大前提があることと、「道徳」という言葉よりも、その内容をシラバスに沿って伝えるよう努めたからである。

一方、実践的な指導案づくり、模擬授業および履修者自らが授業に参加し発表するというアクティブラーニング的な要素を増やした場合、当然の結果ともいえるが、抽出語リストにおける「語」の出現頻度、および「共起ネットワーク」における「語」の繋がり方などに変化が生じている。このことは、履修者の授業に対する意識の変化が反映されていると考えられる。また、「関連語検索」を用いると、抽出語数の上位にある「思う」「難しい」などの「語」の意味は多様であり、文脈による意味の相違が明らかになった。結果として「共起ネットワーク」「KWIC コンコーダンス」「関連語検索」「外部変数（授業回数）」を用いて、抽出語間および授業回数との共起性を可視化分析すると、指

導方法を改善することで履修者の意識およびその変化を一定、読み取ることができた。

第2段階として、5つのコードを構成するコーディングルールを用いて分析・考察した。例えば、平成30年度前期および令和元年度前期のコードの単純集計の結果を見ると、最も頻度の高いコードは、平成30年度では「授業づくり」、令和元年度では「自己理解・他者理解」であり、それぞれ「自己理解・他者理解」「授業づくり」がそれに続いている。どのコードにも該当しなかった文書「コード無し」は、平成30年度前期よりも令和元年度前期の方が約5%低くなっている。これは、平成30年度前期よりも令和元年度前期の方が、授業コンセプトについては、僅かながら各コードに、より多く反映されていることになる。つまり、授業感想文中に、コードを構成する抽出語がより高い頻度で含まれているので、将来の授業者として履修者の意識も高まっているといえる。また、クロス集計を見ると、両年度前期ともに授業1・2回目の主要な授業コンセプトに対応するコード「道徳教育（道徳科の必要性）」について、その出現頻度は、「自己理解・他者理解」には及ばなかった。そこで、令和元年度前期の授業の3回目に、特に「道徳教育（道徳科）の必要性」に関わって、“道徳性の発達”という視点を入れて授業展開したところ、このコードに関わる抽出語や「授業者としての意識」に関わる抽出語の頻度が増加したことから、履修者の意識が高まってきたと考えられる。結果として、コーディングルールを用いた分析において授業改善の効果がより深く確認できた。なお、「コード無し」に属する「語」を精査すると、授業で使用した教材についての感想、中間テストについての感想に関わる記述があった。また、「道徳教育（道徳科）の必要性」というコードに関連している「どの教科にも道徳」「道徳教育の要」「何をするための授業か」などという記述もあった。これらを定義済みのコードに新たに抽出語として加えることができる。さらに、外部変数として「授業回数」を指定し、5つのコードに対するクロス集計を対象に、カイ（ χ ）2乗検定を行った。その結果、有意水準1%で有意となり、「授業回数」に対して「コード」間の出現頻度に差（関連性）があることを確認した。すなわち、毎授業時の履修者の意識は、この5つのコードと、それに対応する抽出語で概ね表せることが分かった。しかしながら、各年度ともに〔道徳指導法〕における授業回数ごとに授業のコンセプトが必ずしも反映できていないことや、より適切なコードの設定、ならびに、それに対応する「語」の選定の見直しが必要であることは、今後の課題である。

まとめ 本研究では、毎授業時の「感想文」に対してテキストマイニング（KH Coder）による可視化および授業コンセプトに対応する適切なコードとそれを構成する「語」に基づくコーディングルールを用いて分析することで、本授業における履修者の意識変化を、より客観的に評価できることが分かった。